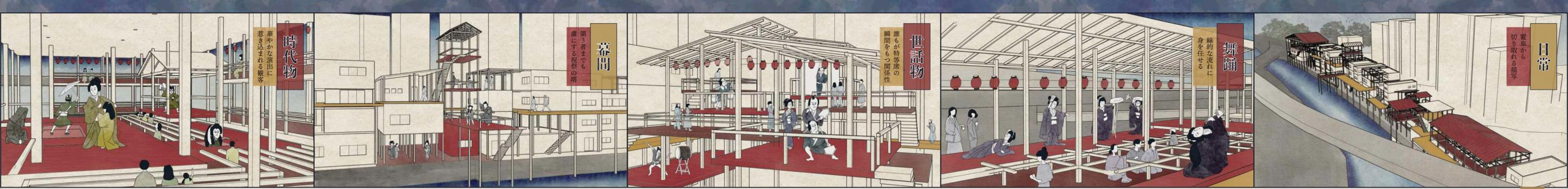


川に舞う

「都市の裏側から広がる劇場化計画」

「この社会に生きる私たち」
人間は、無意識のうちに仮面を被り、「私」という存在を演じている。
いまや、ソーシャルメディアの日常化により、生ける現在がなく、「私」が複製可能な社会である。時にそれが人々を苦しめ、本来の「私」を見失ってしまう。
大衆に向けられた情報は、
各々の感性により、解釈、表現され、消費は単なる受動的な行為ではなく、創造的なパフォーマンスへと変化していく。
他者がいるからこそ生まれる行為であり、
大勢の内の一人として生きる「私」たちにとって、
都市は大きな舞台なのではないだろうか。
しかし、現在演じる場として与えられている演劇を行う劇場はどうだろうか。
多くの人が大きな箱に閉じられた敷居の高い場所を想像するだろう。
演者から観客へと向けられたベクトルのみではなく、
演者と観客、第三者までもが視線に入る中心のない共存関係の劇場を提案する。



一、江戸の一大祝祭空間

芝居町

芝居町として最初に栄えた江戸時代。江戸名所図屏風から、演劇と見世物の小屋を中心に、歓楽の楽しさが伝わってくる。日常にして非日常に転換可能な性格の一大祝祭空間である。また、江戸の町は、海・川・堀によって形成され、「水の都」として栄えていた。今では芝居と水の直接的関係は考え難いが、かつて日本人には、聖空間は海の近く川と交差するという伝統的な理想郷観があった。芝居町としての拠点は転々と移動を繰り返してきた一方で、「川・橋・船」は共通のものとして芝居町に欠かせない存在であった。



河原者

川辺はいわば番外地であり、世間からはみ出し駆け込む人間も受け入れる、アジール（避難場所）である。このアジールは、文化的な意味を持ち、庶民文化を生み出す基盤となり、自由な発想が許され、歌舞伎の素地を作った。河原で創造されたものが人々の心を躍らせる見世物として巣立っていく。

川・橋・船

日常から非日常への飛翔や転換の構造を担う「川・橋・船」。橋は、川を隔てた二つの世界の連結器としてではなく、二つの世界を隔てる境界、あるいは境界であることを示すシンボルのような一つの結界である。橋を渡ることが対岸の世界が日常とは次元の違う別世界であることを確認させるとも言える。船もまた、川を渡り、辺境の地にあるがゆえに、その都度道行の時空を体験させる仕掛けのひとつである。

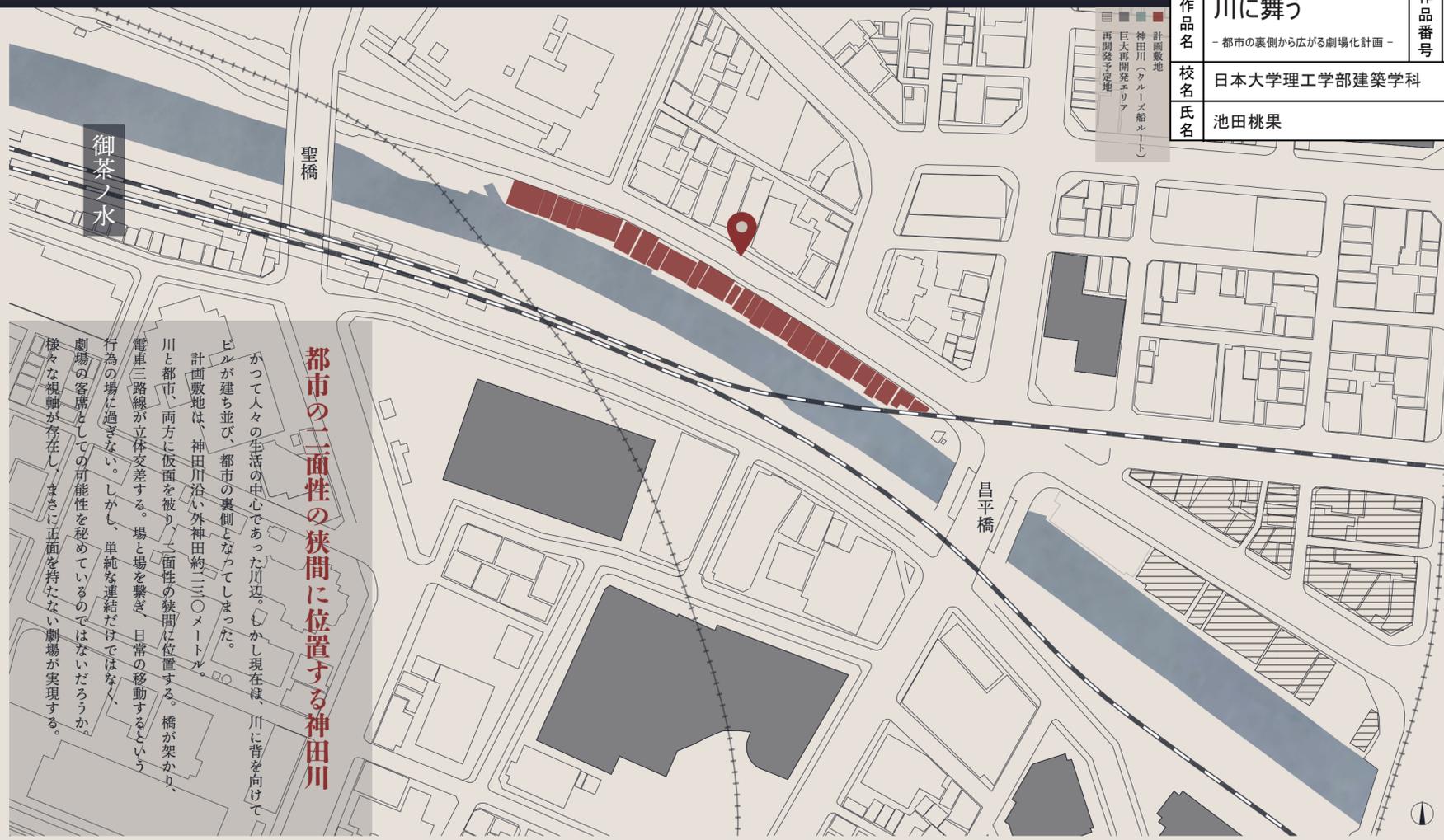
当時を生きた今泉みね氏による回想

きれいな絵巻物でも繰り広げるような気持ちで、あのころのお芝居のことが思い出されます。お芝居といえはばずいぶん楽しみなもので、その前夜などほとんど眠られませんでした。皆の者はあちらにこちらにゆき、身支度でにぎやかなこと。すでに心の中で芝居はもう確かに始まっていました。いよいよ屋根船で参ります。船にのり、街に行くあたりの楽しさと申しましたら、もう足も地につかないほどでした。舞台においても、場面場面で自分たちも一緒に山にいたり野にいたりという風に入れて入ってしまいます。それから幕間には、身なりを着かえ、別人のように変身したり、お菓子をいただいたりと皆で賑やかに過ごしました。芝居町の持つ「陽」の楽しさ、美しさ、はなやかさに導かれ、芝居は もちろん、この高鳴る気持ち自体が忘れぬひと時です。

日常から非日常へ誘う過程が存在し、
全ての潜在者がハレの時空に支配される

作品名	川に舞う	作品番号	
校名	日本大学理工学部建築学科	氏名	池田桃果

- 都市の裏側から広がる劇場化計画 -



ここを起点に再び川へ

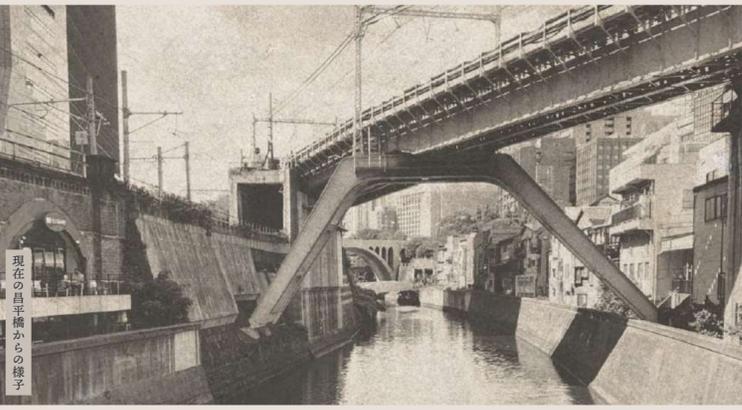
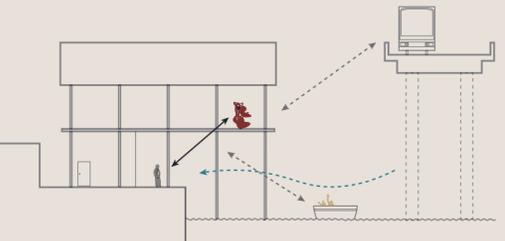
歌川広重が残した「名所江戸百景」のうちのひとつである昌平橋からの描写。当時と比べると景観は大きく異なり、川への意識は淘汰された。

この地で培われた日常に新たに非日常の劇場を挿入することで、再び日常から切り取られる描写として価値のあるものになり、ここから見えてくる一瞬が、何気ない毎日を豊かにしてくれるひと時となることを期待する。

川との関係

変わり続ける都市を許容する不動の川は、ある種永遠に日常の縁。

川辺には、演者の棲処が広がり、演者の役へと擬態する描写が川側からのみ切り取れる。



都市の二面性の狭間に位置する神田川

かつて人々の生活の中心であった川辺。しかし現在は、川に背を向けてビルが建ち並び、都市の裏側となってしまった。

計画敷地は、神田川沿い外神田約三〇メートル。川と都市、両方に仮面を被り、二面性の狭間に位置する。橋が架かり、電車三路線が立体交差する。場と場を繋ぎ、日常の移動するという行為の場に過ぎない。しかし、単純な連結だけではなく、劇場の客席としての可能性を秘めているのではないだろうか。様々な視軸が存在し、まさに正面を持たない劇場が実現する。

日常から非日常へと結ぶ道

「通い路」

今ある日常・躯体は残しつつ、劇場へ誘うための解体を行う。構造的には干渉せず互いに独立したものとして尊重し合う。

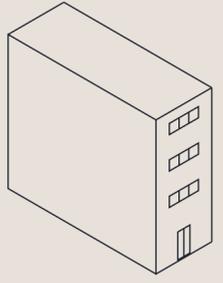


- 一、再開発の置き去りにされた約三〇mの敷地。昭和初期の頃から残る低く水平に伸びる景観を継承しつつ、現状空き家状態、若しくは日常として機能しきれていない建物を解体し、劇場という機能を持った非日常空間を新たに挿入する。
- 二、劇場挿入に伴い、ホワイエ空間となるような機能を持たない余白をつくる。
- 三、新たに挿入する非日常の劇場と元ある日常を繋ぐように道「通い路」を通す。



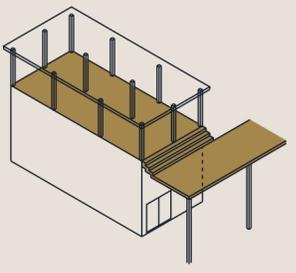
既存

ファサード(仮面)を装い、建物内部を内包している。



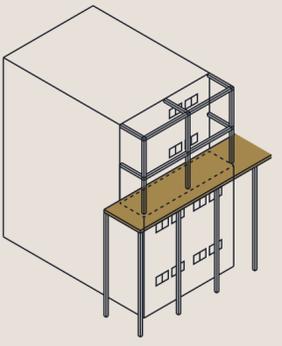
余白

仮面を全て剥がし、視線が抜け、通い路と繋がる。ヴォイド空間を設ける。



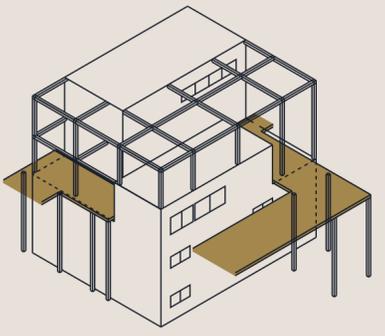
纏う

セットバックをし、既存躯体には干渉せず建物の周囲に巻きつけるように通い路を通す。



侵食

一部減築を行い、建物内部まで通い路を侵食させる。露出した躯体をくぐることで異空間へと飛翔する。



どこからが見世物なのか、
 観客という立場が生まれるのか、
 一様な見方ではないからこそ
実像と虚像のオーバーレイが生まれ、
 見慣れた日常のこの場所・時を手掛りに
 様々な仮面を持った「私」という存在を
 肯定できる場となることを願う。

櫓をあげる

「櫓をあげる」ことが
 劇場における全ての物事の始まり。
 水平に続く日常の中に
 ハレの象徴として聳え立つ。



歌舞伎・みどり

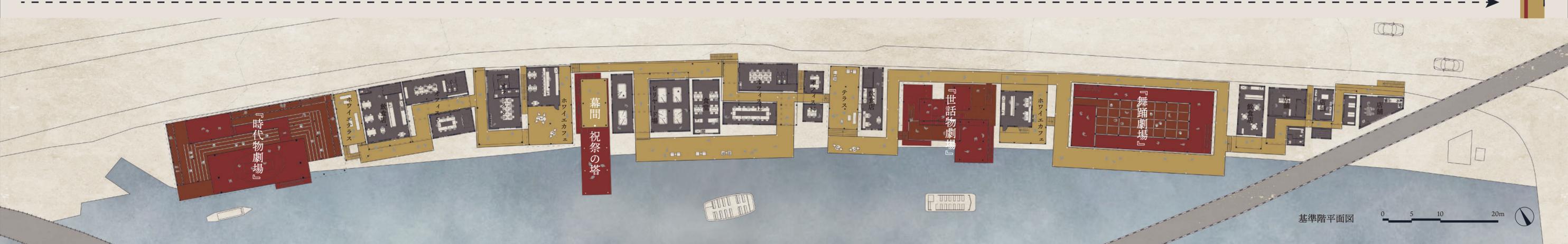
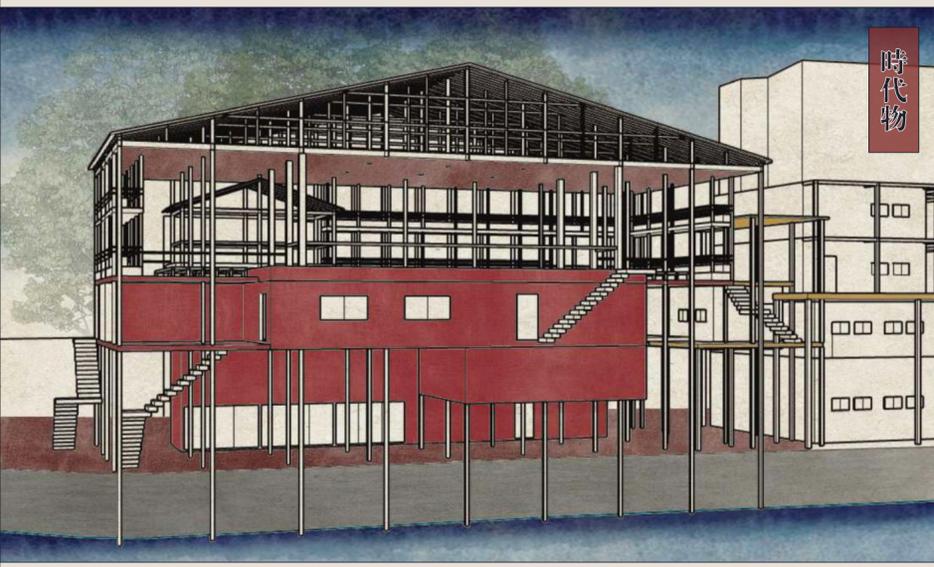
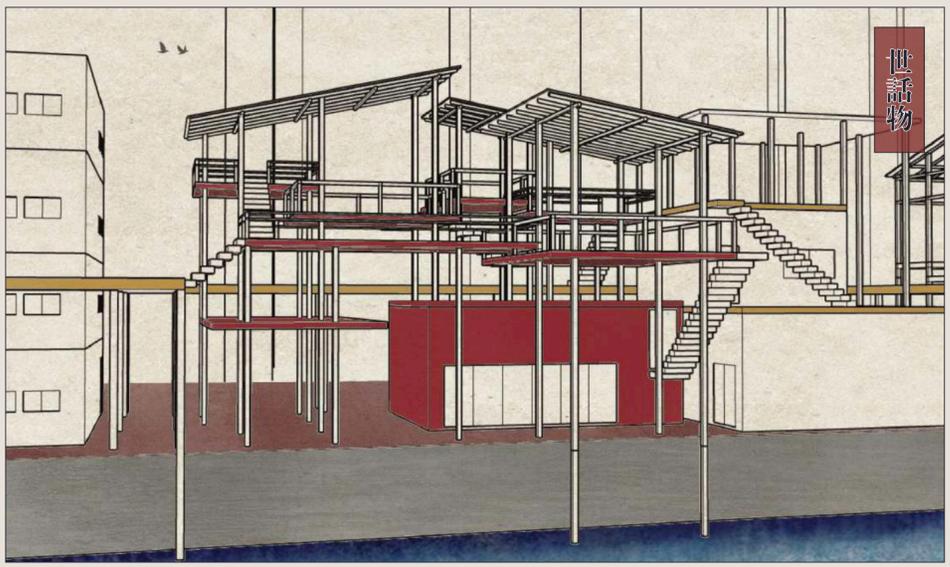
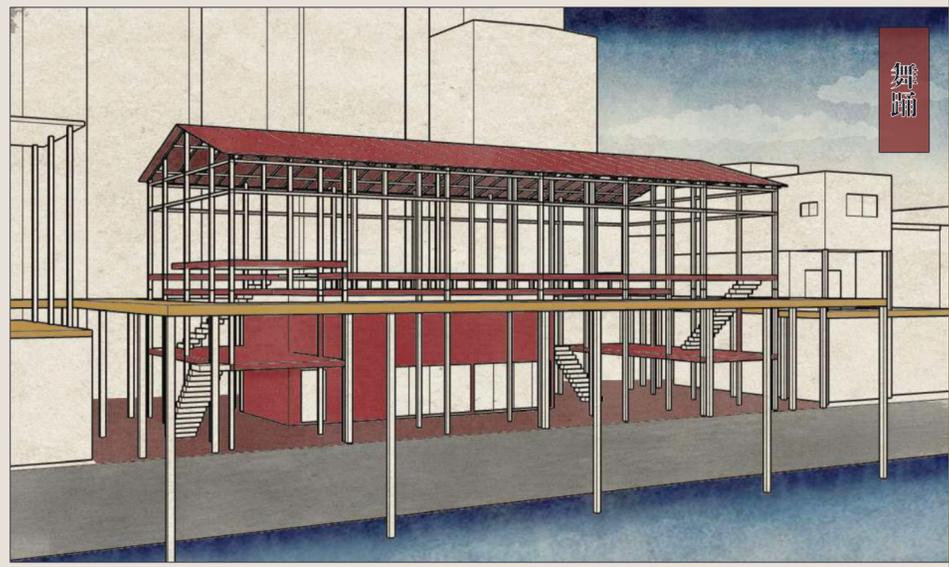
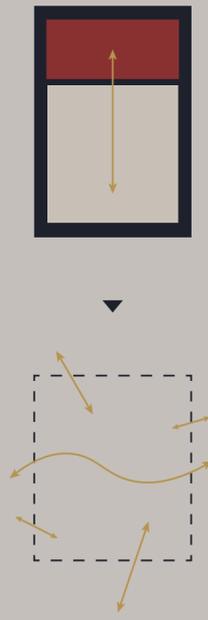
「時代物」世話物」舞踊」の異なるジャンルの
 演目の名場面を選び取り見取り楽しめる上演形式

日常を題材にした物語の中で、装いは非日常の見世物として見える歌舞伎。
 かつて芝居見物が旅行のような高揚感を人々にもたらしていたように、
 演者の芝居のノリ・ハレの時空に身も心も委ねる。

近代劇場構造の解体

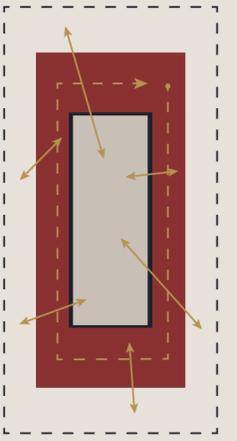
均質空間を求めたプロセニウム形式

舞台作品というあらかじめ他者に提示されたものを観る行為によってのみ
 演劇に参加することが許される。その結果、観客は受動的にならざるを得ない
 アノニマスなマスとしての存在になってしまった。
 また、劇場から一步外に出るとすぐに日常に切り替わり、
 心躍る非日常の世界は一瞬にして消えてしまう。
 この厚い壁を剥がし、ハレの時空を都市へ広げる。



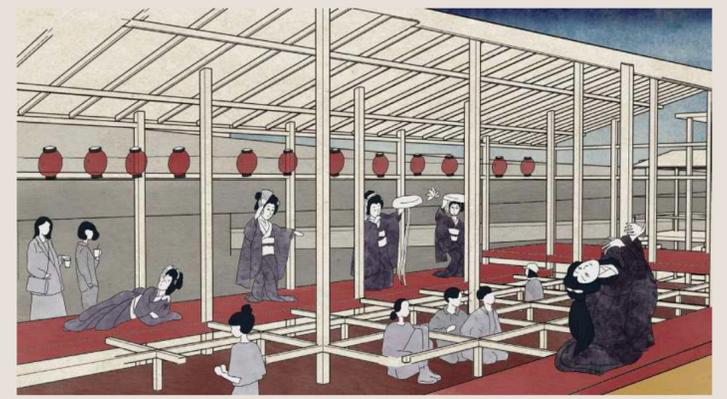
舞踊

道行 - 花道



一連の時間の流れに身を任せ、
日常から演劇の世界へと
憑依する。

ほとんどセリフのない踊りだけで物語性を表現する「舞踊」。
線的な舞台は、演者が近づき去っていくという視点と終点が視野の外に存在するが、セリフが無いからこそ空間の空気感が劇場を超えて伝染していく力を持つ。ハレの場が意識内に潜在化され、自己の解釈とともに演劇の時間軸の中に生きていく。



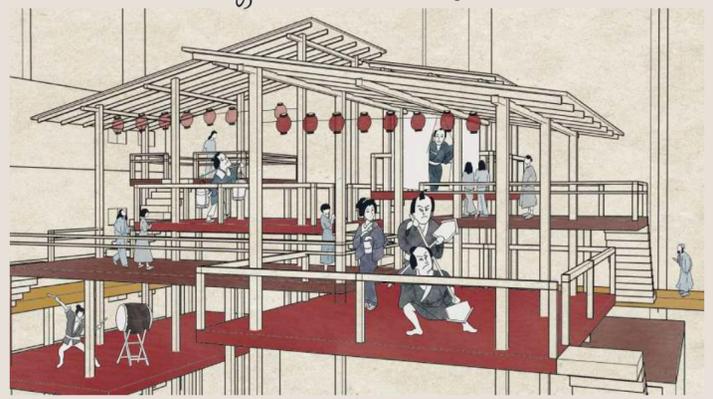
世話物

積む



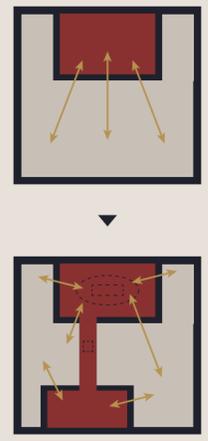
演者の臨場感を肌で感じ、
異なった個人のもの見方により
認識される劇空間は多様に化する。

写実的でカジュアルな「世話物」。比較的親しみやすい物語のため、従来の演者と観客の関係を解体。かつては、樽や俵、箱を劇場の正面に上へ上へと積むことが、演者への敬意、めでたいことへの希求心の表れであり、聖空間を構築する重要な仕掛けのひとつであった。劇場そのものに置き換えると、舞台と客席が無造作に積まれ、誰もが特等席となる瞬間を得ることができる。



時代物

敷敷



舞台を囲み、
観客が身を乗り出す
ような一体感を演出する

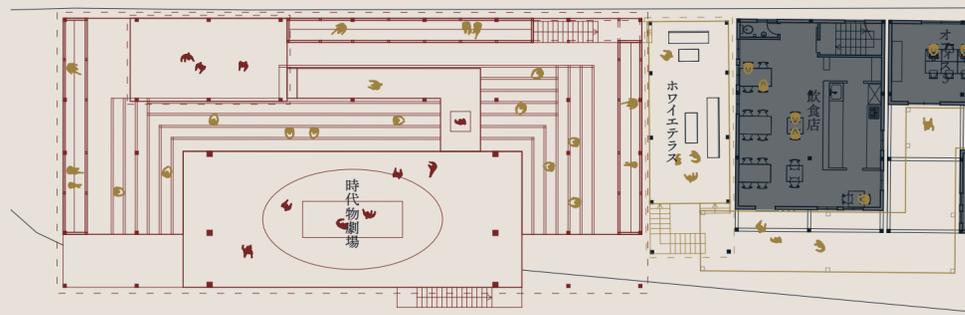
江戸の人にとって時代劇にあたる「時代物」。華やかな演出が特徴で、セリフの言い回しが現代の人々にはやや難解。そのため、歌舞伎の基本を知るという意味でも従来の形式を継承した舞台構成を取る。観客が舞台を囲むだけでなく、舞台上に挟まれることで、まるで演劇作品の一部のような存在へと変化する。



日常と非日常の混在した賑わいが街へと広がる

クルーズ船から演者の面性が観える

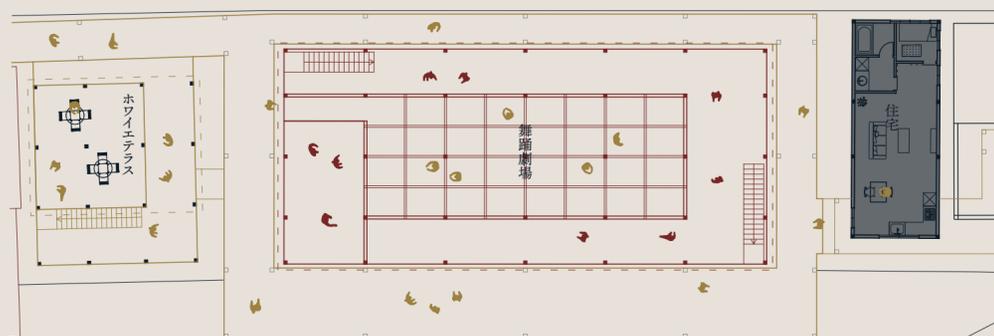
露出した躯体をくぐることもと日常と非日常を横断する



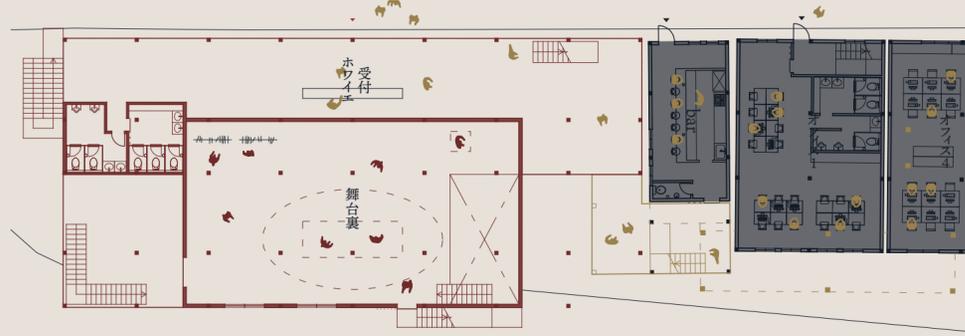
三階平面図



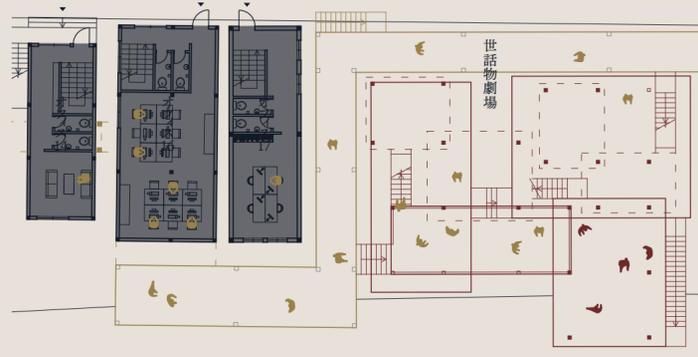
三階平面図



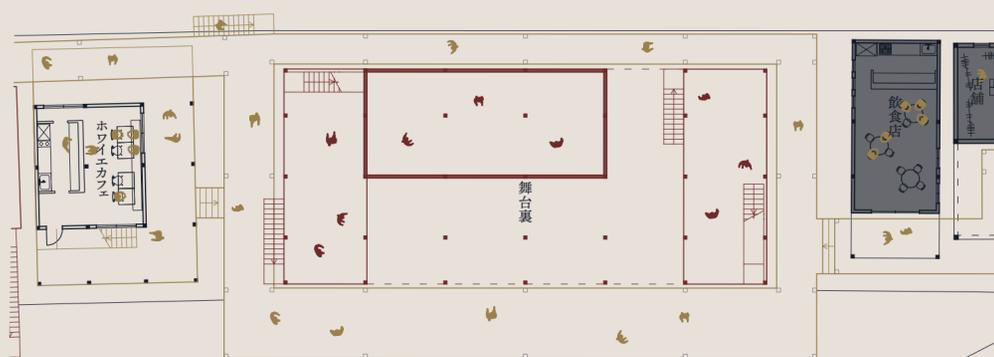
三階平面図



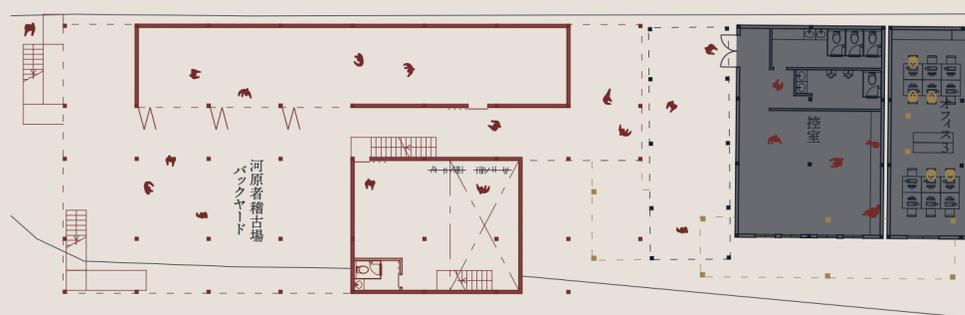
二階平面図



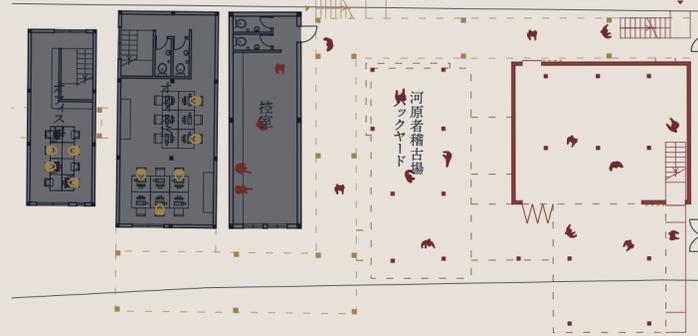
二階平面図



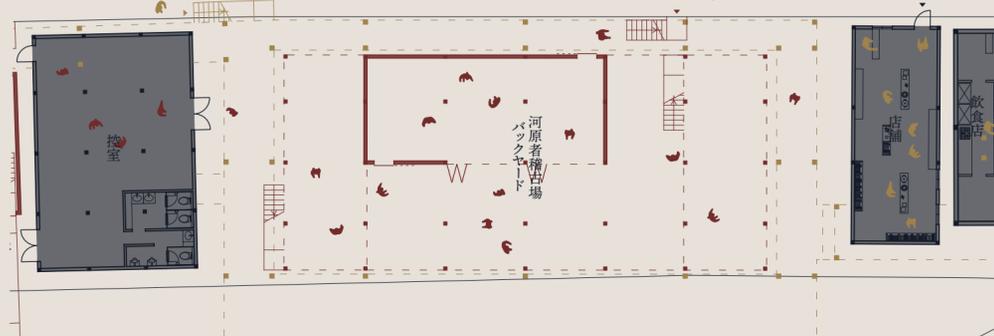
二階平面図



一階平面図



一階平面図



一階平面図